

## テーマ 「これからの病理検査を考える」

主催 病理検査研究班

実施日時：令和3年7月14日（水） 18時00分～19時00分

Web環境

点数：専門教科－20点

講演：「AI病理診断の試みと今後の展望」

講師：松嶋 惇 先生（獨協医科大学埼玉医療センター 病理診断科）

参加人数：会員 102名 賛助会員 0名 学生 1名

出席した研究班班員：岡村卓哉、関口久男、森田繁、荻真里子、細沼佑介、高橋俊介、小島朋子、三鍋慎也

### 研修内容の概要・感想など

昨今、医療技術の進歩も目覚ましいが、「人工知能（Artificial Intelligence：AI）」に関しても、その用語が使われてから 50 年余りで驚異的な進化を遂げている。そして、この AI 技術を医療の分野へ導入することも試みられており、今回、病理検査研究班では「これからの病理検査を考える」をテーマに、獨協医科大学埼玉医療センター病理診断科の松嶋 惇先生に「AI 病理診断の試みと今後の展望」と題してご講演いただいた。

松嶋先生の研究チームは、AI を用いた胃癌のリンパ節転移巣の検出を試みられてきたとこのことで、診断精度も向上してきており、病理診断への応用が着実に進んでいることが感じられた。一方で AI 診断の責任の所在や、説明性（診断の根拠）の難しさ等も課題として挙げられた。

参加者からの質疑では、「HE の染色性による AI 診断への影響に関して」や「染色を行う際の注意点」等が挙げられた。HE の染色性による診断への影響はあるとのことで、また、剥がれや重なり等も影響があるとのことであった。検査技師としては、AI の時代になっても美しい標本を作ることが重要であり、また、より均質な標準化された標本作製も必要になってくるのではないかと思われた。

今回は他県からの参加者も多く、興味深いテーマであることがうかがわれた。今後の AI 病理診断の発展を見守りつつ、また、それに見合う標本作製技術の向上を目指すことが病理検査技師に課せられた責務であると考えられた。

（文責：三鍋 慎也）